

「防災は近助から」

群馬県 伊勢崎市立宮郷中学校 3年 羽鳥 恵太

昨年の7月、熱海で大規模な土砂崩れが起きました。26人もの命を奪い、今も1名が行方不明のままです。

僕は、今でもテレビに映った、あの光景を忘れることが出来ません。建物や車、大木を巻き込みながら斜面を流れる、真っ黒な土石流。救助に向かっていた消防車や消防士が間一髪で巻き込まれずに済み、撮影者の悲鳴が同時に聞こえていました。自宅でテレビを見ていた僕でさえ恐怖を感じたので、現場にいた人はどれほど怖かったことでしょう。

その光景を見ながら、母と兄は過去に起こった土砂災害のことや、災害にあったとき、どうしたら命を守れるかを話していました。2人は防災士で、災害についてたくさんの知識を持っていたからです。

僕も2人のように災害のことを学んで一緒に話せるようになりたいと思い、昨年12月に防災士になりました。防災士は、いろいろな災害から自分や家族、地域を守るための、民間人の防災リーダーのことです。

防災士になるためには、災害に関する2日間の研修とテストに合格しなければなりません。研修もテストも僕が初めて聞くことばかりで、とても難しい内容でした。

最初の講義は、防災士が創られた理由でした。阪神淡路大震災のとき、近所の人達が力を合せ、がれきの下敷きになった人をいち早く救出し、多くの人命が救われました。このことがきっかけになり、住民や地域の力が再認識され、防災士が創られました。

講義では過去の災害についても学びました。日本で発生した自然災害で、最も多くの犠牲者が発生しているのは、土砂災害によるものです。土砂災害は洪水と違い、前兆が目で見えないことが多く、突然襲ってくるので、避難の判断がしづらいからです。また、日本は雨がとても多く、山を切り開いた場所に多くの人々が住んでいるので、土砂災害の被害が起こりやすいのです。災害が少ないと言われている群馬県でも、台風19号の時は、富岡市と嬭恋村で大規模な土砂崩れが発生し、4名もの人が亡くなっています。

地球温暖化の影響により、台風はどんどん大型になり、降る雨も過去に記録したことの無い量になっています。今年になってからも日本各地で洪水の被害が起っています。

大地震の発生する確率も高まっていて、いつでもどこにいても災害の犠牲になる可能性があるのです。

僕は、防災士になってから、地域のために何ができるのかを考えていましたが、自分に出来ることが見つかりませんでした。そんなとき、3月16日に東北地方を震度6強の大きな地震が襲い、多くの建物が壊れ、けがをした人や亡くなった人もいました。この地震のあと、インターネットでこんな見出しのニュースを読みました。

「震度6以上だったら・・・」仙台の高校生、地震の夜「約束」果たす。」

記事には、幼馴染の高校1年生の2人が、地震の後に近所のお年寄りの家を回って安否確認の声掛けをしたことが書かれていました。

2人は普通の高校生ですが、東日本大震災を直接経験しています。そして、次に大きな地震が来たら近所のお年寄りに声をかけようと約束していたそうです。2人は「当たり前のことをしてだけ、高齢者がけがをして誰も助けに来なかったら悲しい」と話していました。

僕は、年齢に近い2人の行動を知って「これだ」と思いました。防災士だからと背伸びをする必要はなく、その時の自分ができることをやれば良いと気付きました。中学生ならこの2人のように高齢者だけの家庭や小さな子供がいる家庭などに声をかけたり、学校の避難訓練のときに防災のことを話したりすることができます。そして、僕と同じような考えを持つ仲間を増やしていけば、僕の町では災害の犠牲者を無くすことが出来ると思うのです。

2人の記事を読んで、防災士研修で「地域を守るにはご近所が助け合うことが1番大切です。地域の防災は近助からです。」と言われたことを思い出し、こういうことなんだと実感しました。

令和4年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

僕はまだ実際の災害を経験したことはありません。でも、過去の災害から自分なら何が出来るかを考え、地域を守る近所の一員として活動していきたいと思っています。